

『南山神学』27号(2004年2月) pp. 159-171.

【研究ノート(霊性神学)】

## 古代西方教会における「ルミナチオ」

西脇 純

はじめに

聖書の伝統によれば、イエスは弟子たちに「気を落とさずに絶えず祈るべき」ことを教え(ルカ 18:1 参照)、パウロも自らの宣教によって設立された教会の信徒に「絶えず祈りなさい」と勧めた(1テサ 5:17)。

「絶えず祈れ」 この勧めは、その後のキリスト教会の霊性に計り知れない影響を与えることになる。

古代教会においても、この勧告に忠実たらんと、さまざまな取り組みがなされた。信徒の置かれた状況によりその形態はまちまちであったが、共同で、すなわち典礼の枠組みのなかでこの勧告に取り組んだか、あるいは個人で各人の修養としてなされたか、ここに一応の線引きが可能だと思われる<sup>1</sup>。むろん、共同体の祈りと個人の祈りとは、祈る者の意識においては互いに排除し合わないことはいうまでもない。

---

\* 略記は S. M. Schwertner, Theologische Realenzyklopädie. Abkürzungsverzeichnis. 2., überarb. und erw. Aufl., Berlin-New York 1994. によった。教父の著作は Lexikon für Theologie und Kirche. 3., völlig neu bearb. Aufl. Bd. 11, Freiburg-Basel-Rom-Wien 2001. の略記法に従った。

<sup>1</sup> この線引きについて、R. Scherschel, Der Rosenkranz – das Jesusgebet des Westens (FThSt 116), Freiburg-Basel-Wien 1982, 21-22 を参照。

共同で祈る場合、日に数回、日の出や日没など節目となるある特定の時間に集まって祈るという方法がとられた。司教座聖堂や共住修道院などにおける典礼実践がその例である。この場合、「絶えず」の文言は「定時の祈りの反復」と解釈されたといえる。この取り組みは、やがて「時課の典礼」へと発展してゆく。

他方、個人で祈る場合には、文字通り「絶えず祈る」という理想が追求された。各人がそれぞれ方針を立てたうえで、時間や場所にとらわれずに、それぞれの分や能力あるいは事情に応じて、祈る時間の持続の程度を加減することができたのである。

たとえば、砂漠の師父たちをはじめとする古代の隠修士たちは、「絶えず祈れ」の勧告に武骨なまでに従おうとした求道の徒だった。彼らが実践し深化させた祈りは、のちに「イエスの御名の祈り」として結実する。

「イエスの御名の祈り」とは、「主、イエス・キリスト、神の子、罪人なるわたしを憐れみたまえ」というルカ 18:38 par. 他に基づく短い祈りを、呼吸に合わせ幾度となく繰り返し唱える、東方教会固有の瞑想法である。「イエスの祈り」とも「心の祈り」とも呼ばれる。この祈りを実践する者は、「自分の息吹を神の息吹と混ぜ合わせ」「その呼吸にイエスの御名をはりつける」ことにより、名で呼ばれる現存者、すなわちイエスとの「ペルソナの出会い」(と一致)へと導かれるという。ヘシューキア(静寂・平安)と呼ばれるその境地では「聖霊においてキリストを通して父に向けて実現する三位一体的エネルギー」が現実のものとなる。そのいのちに生かされて、パウロが「絶えざる祈り」とともに勧めた、「いつも喜び」「どんなことにも感謝する」(1テサ 5:16.18a) 真に秘跡的エウカリスティア的人間となることが目指される<sup>2</sup>。

ここでは二つの点に注目しておこう。一つは、「イエスの御名の祈り」の文言が聖書の言葉に基づくという点である。つまり、東方の靈性伝統においては、

<sup>2</sup> オリヴィエ・クレマン/ジャック・セール著、宮本久雄/大森正樹訳『イエスの祈り』(東方キリスト教叢書 III, 新世社, 2002年[第2版]) 参照。引用は 39, 47 頁より。

「祈る」あるいは「絶えず祈る」という場合、まずもって聖書、すなわち神の言葉を繰り返し唱え心に銘記することから始まるということである。いま一つは、その祈りがイエスに宛てられるという点である。親しく名で呼びかけることによってイエスの臨在を願う、いわばロゴス・エピクレーシスになっている。繰り返し呼び求めることによって、「みことばイエス」との一致に至らんとする、キリスト者の生のあり方の飽くなき追及であるともいえようか。

その意味では、西方教会も砂漠の師父の伝統から多くを学んだといえる。「絶えざる祈り」は、東方教会の「イエスの御名の祈り」の根底を流れるのみならず、西方教会の霊性伝統をも育んできた。以下、「絶えざる祈り」の西方における足どりを、古代教会の「ルミナチオ」の伝統に着目しつつ素描したい。

## 1. ルミナチオ 反芻

聖書の言葉を繰り返し唱え信仰生活の糧としようとする黙想法を「ルミナチオ ruminatio」という<sup>3</sup>。「反芻」を意味する。レビ 11:3 あるいは申 14:6 で言及される反芻動物（「ひづめが分かれ、完全に割れており、しかも反芻する動物」）に由来する表現である。聖書によれば、反芻・偶蹄類は清浄な生きものであり、イスラエルの民が食べてもよい動物とされた。彼らの独特の食餌の仕方が、聖書の言葉、すなわち神の言葉を大切にし生活の拠り所とするキリスト者のメタファーとなった。

こうした意味でのルミナチオが登場する最初のキリスト教文献は『バルナバの手紙』である。この中で手紙の著者は、レビ 11:3 の意味を次のように解き明かす。

---

<sup>3</sup> Cf. E. Severio / Aimé Solignac, Art. Méditation, in: D.S. X, 908-909; F. Ruppert, Meditatio – Ruminatio. Zu einem Grundbegriff christlicher Meditation, in: EuA 53 (1977) 83-93; E. Scholl, Pondering the Word: Meditare and Ruminare, in: CiSt 28 (1993) 303-310.

しかし、彼[モーセ]は何を言っているのか。主を恐れる人たち、心の中で、うけた言葉の特別な意味に思いを致す人たち、主の正しい命令を（他の人に向かって）語り、かつ守る人たち、熟考することが喜びのわざであることを知って主の言葉を反芻する人たち（このような人たち）と交際せよ（と言っているのである）。<sup>4</sup>

この箇所は、単に「熟考」を動物の「反芻」になぞらえるだけでなく、「主の言葉を反芻する人たち」の心持ちをも描く。キリスト者にとって反芻は決して辛い修行ではない。確かに聖書の言葉が信仰者の血肉となるためには「反芻」が必要であるが、彼らが反芻するのは、そのような仕方では聖書を黙想することが「楽しみ（喜びのわざ *ergon eufrosunhj*）」となることを知っているからである。草を食み終えた動物が、その後めいめい野に身を横たえ反芻にいそしむ姿にも似る。

同様の解釈はアレクサンドリアのクレメンス<sup>5</sup>、アウグスティヌス<sup>6</sup>などにも見られ、東方はもちろんのこと、西方でも広く流布していたことをうかがわせる<sup>7</sup>。

このようにルミナチオは、キリスト者の聖書に対する姿勢を言い表す暗喩であることを一義とする。

<sup>4</sup> Barn. 10, 11c = SC 172, 158-159. 邦訳は佐竹明訳「バルナバの手紙」荒井献責任編集『使徒教父文書（『聖書の世界』別巻4・新約Ⅱ）』（講談社、<sup>2</sup>1980年）43頁より。聖書の黙想を動物の反芻にたとえるメタファーはユダヤ教でも知られていた（アレクサンドリアのフィロンなど）。これについて、SC 172, 158のN. B. 2を参照。

<sup>5</sup> Cf. Clem. Alex., paed. III, 11, 76 = SC 158, 148-149.

<sup>6</sup> Cf. Aug., serm. CXLIX, 4 = PL 38, 801（テキストは注15）; Id., enarr. in Ps. XXXVI, iii, 5 = CChr.SL 38, 371（テキストは注16）.

<sup>7</sup> Cf. D.S. X（cf. N. B. 3）, 908-909; Ruppert（cf. N. B. 3）, 84-88; Scholl（cf. N. B. 3）, 304.

しかしながら、すでに早い時期から、ある特定の聖書句を射祷のように復唱して黙想の手立てとするということも行なわれた<sup>8</sup>。これがのちの「イエスの御名の祈り」の源流となることについてはすでに触れた。

こうした実践としてのルミナチオは、はじめは詩編の言葉に基づく短い祈りの反復が主流だったようである（この点では、後述する西方教会のルミナチオにも並行情がある）。しかし次第に、「イエス」の名を直接呼ぶ射祷が本流となったという<sup>9</sup>。その最古の例が、6世紀頃に書かれた『ドシテオスの生涯』の中に見出される定式「主イエス・キリスト、わたしを憐れんでください」であるといわれる<sup>10</sup>。今日の「イエスの御名の祈り」と同じく、福音書に登場する病者の、イエスへの呼びかけの言葉である（ルカ 18:38 par. [前出]）。古代教会には詩編をイエスに呼びかける祈りとして唱える伝統があり<sup>11</sup>、イエスの名を直接呼ばない、詩編による初期のルミナチオも、実のところイエスへの射祷の反復だった可能性が高い。いずれにせよ、聖書に基づく文言がルミナチオの実践の骨格をなしていたことには変わりない。

<sup>8</sup> 「射祷 oratio jaculatoria」とは「矢を放つ jaculari」ように短く唱える祈りを指す。アウグスティヌスの手紙 130 の次の表現に由来する。Cf. Aug., ep. 130, 20 = CSEL 44, 62: *dicuntur fratres in aegypto crebras quidem habere orationes sed eas tamen breuissimas et raptim quodam modo iaculatas, ne illa uigilanter erecta, quae oranti plurimum necessaria est, per productiores moras euanescat atque hebetetur intentio*。アウグスティヌスはここで、非常に短い祈りを急いで「矢が放たれたかのように [orationes] quodam modo iaculatae」唱えるエジプトの修道者の習慣に言及している。しかもその祈りは「繰り返し [唱えられる祈り] crebrae [orationes]」だったという。ルミナチオの実践を示唆していると思われる。射祷について H. M. Gosebrink, Art. Stoßgebet, in: LThK 9, 1021. を参照。

<sup>9</sup> Cf. E. Jungclaussen, Art. Jesusgebet, in: PLSp (Sonderausgabe. Freiburg-Basel-Wien 1992), 672-677. 673.

<sup>10</sup> Cf. Vita Dosithei = SC 92, 138-139; Jungclaussen, *ibid.*

<sup>11</sup> Cf. Barth. Fischer, Die Psalmen als Stimme der Kirche. Gesammelte Studien zur christlichen Psalmenfrömmigkeit. Hg. v. Andreas Heinz [u. a.], Trier 1982, bes. 15-35. 37-71. 85-95. 97-102. 139-152. フィッシャーによれば、古代教会では、型の論理の手法による聖書のキリスト論的集中が隆盛し、結果、詩編全体が「父に呼びかけるキリストの声としての詩編 Psalmus vox Christi ad Patrem」あるいは「キリストに呼びかける教会の声としての詩編 Psalmus vox Ecclesiae ad Christum」もしくは「キリストを語る声としての詩編 Psalmus vox de Christo」であると理解されるに至った (Ibid. 22-23. )。

つまり、そもそも聖書を読み、その言葉の意味を心に取り込み、繰り返し味わい楽しむこと、すなわち黙想（メディタチオ）自体が、少なくとも古代教会においては「反芻動物」の食餌に似た、人間の諸器官をはたらかせる作業であり、いわばルミナチオだったということなのである。

## 2. ルミナチオとメディタチオ

たとえばアウグスティヌスが『告白』の中で師アンブロシウスの読書の仕方をわざわざ記していることから知られるように<sup>12</sup>、古代教会においては、アンブロシウスがとったような黙読は奇異な現象として目に映った。当時は、聖書であれ、他の書物であれ、声に出して読むのが常だったからである。声に出して読んだうえで、あるいは声に出して読みつつ、その内容についての理解が図られたのである。聖書に関していえば、写本を手に取り自ら声に出して読むことはなくとも、信徒は典礼集会や教話などの折に聖書が朗読されるのを聞いた。説教には聖書からの引用句が随所に鏤められた。聖書は音響を伴って信徒のもとに届き、各自の黙想に供せられたのである。したがって、「心の中で、うけた言葉の特別の意味に思いを致す（*meletah*）」こと（『バルナバの手紙』）、すなわち神の言葉の黙想は、読書もしくは朗読という発語行為の延長線上に位置したということができる。

このことは、古代教会において、「黙想 *meditari / meditatio*」ということばが、発声を連想させる文脈で用いられていたことから理解できる。たとえばウルガタ訳聖書は、「唸る、呻く」を意味するヘブライ語「*haga*」にしばしば「*meditari*」を充てている。例に「(鳩のように)呻く」(イザ 38:14)「(その教

---

<sup>12</sup> Cf. Aug., conf. VI, iii, 3 = CChr.SL 27, 75, 15-16: *Sed cum legebat, oculi ducebantur per paginas et cor intellectum rimabatur, uox autem et lingua quiescebat.*

えを昼も夜も)口ずさむ」(詩 1:2)「(むなしく)声をあげる」(詩 2:1)などを引くことができる<sup>13</sup>。ラテン神父たちは、しばしば 70 人訳を手元において説教や著作の準備にあたったが、その 70 人訳もこれらの箇所では「*meletah*」を採用している。ここから「*meletah*」あるいは「*meditari*」は、「声を出す」という、音響イメージを伴っていたということが分かる<sup>14</sup>。

かといって、黙想が常に声を出しておこなわれたというわけでもない。今日の「黙想、内省」という意味も歴としてあった。

つまりメディタチオは、発声と咀嚼という、口腔のもつ二つのはたらきと関連づけられた語彙だったということだろう。だからこそ、聖書の言葉に対する姿勢を説く文脈で、ルミナチオのイメージがメディタチオの説明に役立ったのである。

たとえばアウグスティヌスは、先に挙げた詩 1:2 の「口ずさむ *meditari*」は「反芻する *ruminare*」ことであるとし、その意味を次のように説く。

[ 聖書の言葉を ] 聞いてもなおざりにして忘れてしまう人は、聞いたことを [ 丸ごと ] 呑みこんでしまう人のようです。[ こういう人は、 ] 忘れっぽく、聞いたことをそのまま流し込んでしまって、口で味わうことがありません。けれども「主の教えを昼も夜も口ずさむ人」(詩 1:2) は、いわば反芻するのであり、心にあるちょうど口のようなところで言葉の味を楽しむのです。<sup>15</sup>

つまり、口ずさむこと(メディタチオ)とは反芻すること(ルミナチオ)に

<sup>13</sup> Cf. E. Severus, Das Wort »Meditari« im Sprachgebrauch der Heiligen Schrift, in: GuL 26 (1953) 365-375.366-367.

<sup>14</sup> Cf. Ibid.

<sup>15</sup> Aug., serm. CXLIX, 4 = PL 38, 801: *Qui ergo audit, et negligentia fit obliuiosus, quasi glutit quod audivit: ut jam in ore non sapiat, auditionem ipsam oblivione sepeliens. Qui autem in lege Domini meditatur die et*

ほかならず、それは「心の口 palatum cordis」で聖書の言葉を幾たびも味わうことだというのである。『パルナバの手紙』で確認した「喜びのわざ」としての黙想が、ここでは「言葉の味を楽しむこと *verbi sapore delectari*」と表現されている。

詩 1:2 を扱う別の箇所では、アウグスティヌスは、聖書（神の言葉）をマタ 4:4 に基づいて「パン」と呼び、聖書の食物としてのイメージをよりいっそう鮮明にしている。

「その教えを昼も夜も口ずさむ。」(詩 1:2)[普通の]パンならばひととき食べて消化しつくしてしまいます。しかし、かの「ことばのパン」(マタ 4:4 参照)を、あなたは昼も夜も食べているのです。[聖書の言葉を]聞くとき、あるいは読むとき、あなたはそれを食べるのです。また、そののち[そのことばについて]考えをめぐらすとき、あなたはそれを反芻するのです。汚れた動物ではなく、浄い動物であるために(レビ 11:3, 申 14:6 参照)。<sup>16</sup>

ここでも、聖書のことばを口ずさむこと(メディタチオ)は、それを反芻すること(ルミナチオ)と結びつけられて説明されている。発声と咀嚼という、メディタチオのもつ共示的な含意が、ルミナチオのたとえによってより明瞭に伝わってこよう。

*nocte, tanquam ruminat, et in quodam quasi palato cordis verbi sapore delectatur.* Cf. Severus, Méditation (cf. N. B. 3), 909; Ruppert (cf. N. B. 3), 86.

<sup>16</sup> Aug., enarr. in Ps. XXXVI, iii, 5 = CChr.SL 38, 371: *Et in lege eius meditabatur die ac nocte. Panem istum manducas una hora, et dimittis; panem illum uerbi die ac nocte. Quando enim audis, aut quando legis, manducas; quando inde cogitas, ruminas, ut sis animal mundum, non immundum.* Cf. Severus, Méditation (cf. N. B. 3), 909; Ruppert (cf. N. B. 3), 86; Scholl (cf. N. B. 3), 304. 「ことばのパン panis Verbi」という言辞は、「受肉したことば(ヨハ 1:14 参照)」すなわちキリストが聖書(神の言葉)の発言主体であり、みずからの言葉を分け与えて人類を養い導く、との神学に支えられている。したがって「ことばのパン」は聖餐のパンを指すこともある。これについて W. Gessel, *Der Brotcharakter des Wortes Gottes in seiner gemeinschaftswirkenden und einheitstiftenden Funktion nach Augustinus*, in: StPatr XI (1972) 322-327. を参照。

### 3. ヨハネス・カッシアヌスのルミナチオ

ルミナチオがメディタチオの一つの重要なあり方であるということ、アウグスティヌスとほぼ同時代を生きた、もう一人の教父からも学ぼう。

5世紀初頭にマルセイユで修道院を創設したヨハネス・カッシアヌス(432/435年没)は、ベツレヘムで修道士となり、エジプトの隠修士たちのもとで研鑽を積むなど、東方の修道靈性に通暁した教父だった。東方の靈性を西方に橋渡しした人物として名高い<sup>17</sup>。そのカッシアヌスによると、聖書の言葉のルミナチオこそ修道者の「歩むべき道(イザ 30:21 参照)」である。

[イザ 30:20-21 の引用]したがって、あなたの心の[向かう]ところすべて、あるいはあなたの心の[うちでなされる]黙想、のみならず、あれこれと思い巡らして散漫なあなたの考えさえ、神の掟を絶えず反芻する聖らかなものとなることだろう。<sup>18</sup>

ここにも、メディタチオの内容説明がルミナチオのメタファーによって展開されている例を見ることができる。

ただしこの引用だけをみれば、旧約聖書の示すルミナチオの感覚的なイメージがもっぱら純粋な精神活動として理解されていたかに思われる。しかしルミナチオは、実際に声に出して唱えられることもあった。そしてこうした実践のあり方を証言するのにもまた、東方の修道制を実地に学んだ経験のあるカッシアヌスである。著書『共住型修道士綱領及び八つの主な悪徳の矯正について』の中で、彼は東方の修道士たちの習慣を次のように紹介している。

<sup>17</sup> Cf. O. Chadwick, Art. Cassian, Johannes, in: TRE 7 (1981) 650-657.

<sup>18</sup> Cassian., conl. XIV, 13 = SC 54, 201-202: *Atque ita fiet ut non solum omnis directio ac meditatio cordis tui, uerum etiam cunctae euagationes atque discursus cogitationum tuarum sint tibi diuinae legis sancta et incessabilis ruminatio.* Cf. Scholl (cf. N. B. 3), 304.

外で働くときには、彼らは、会話が彼らの間に割り込まないような仕方働く。それぞれ任せられた仕事を果たし、その間、覚えている詩編もしくは聖書を復唱する。そのため、共謀や歪んだ忠告はおろか、暇つぶしのおしゃべりのための時間さえおよそ残らない。口と心とは同じだけ、靈的黙想に従事している。<sup>19</sup>

ここでは心とは区別された口が「覚えている詩編もしくは聖書」を「復唱 recensere」している。この発語されたルミナチオは、おしゃべりなどに発言の機会を与えないための工夫だったという。しかし修道者は復唱される聖句に心を合わせることも忘れない。それゆえ、声に出すルミナチオが心のはたらきとともに「靈的黙想 *meditatio spiritalis*」と呼ばれているのである。

実際、カッシアヌス自身、自ら「敬虔な定式 *formula pietatis*」と呼ぶある一句を「絶えざる祈り」として唱えるのを常とした。それは、後に時課の典礼においても重要な役割を果たすことになる詩編唱句「神よ、速やかにわたしを救い出し、主よ、わたしを助けてください *Deus in adiutorium meum intende, Domine ad adiuvandam me festina*」(詩 70:2)である<sup>20</sup>。知られうる最古の西方のルミナチオ定式である。「神」の名で呼びかけられるのは、古代教会の詩編解釈法に沿い、ここではキリストである<sup>21</sup>。

<sup>19</sup> Cassian., inst. II, 15 = SC 109, 84-85: *Quod ita expleat foras egressi, ut nulla inter eos sermocinatio penitus conseratur: sed sic unusquisque opus exsequitur iniunctum, ut psalmum uel scripturam quamlibet memoriter recensendo non solum conspirationi noxiae uel consilii prauis, sed ne otiosis quidem conloquiis ullam copiam uel tempus inperiat, oris pariter et cordis officio in meditatione spiritali iugiter occupato.* Cf. Scholl (cf. N. B. 3), 304.

<sup>20</sup> Cf. B. Sirch, "Deus in adiutorium meum intende". Psalmenmeditation und Psalmodie im Zusammenhang mit dem monastischen Ideal des immerwährenden Gebetes (1Thess 5,17), in: H. Becker / R. Kaczynski (Hg.), Liturgie und Dichtung. Ein interdisziplinäres Kompendium I (PiLi 1), St. Ottilien 1983, 315-343. 現行の「教会の祈り」では、「神よ、わたしを力づけ、急いで助けに来てください」との唱句が三位一体への栄唱とともにそれぞれの時課の冒頭で唱えられる。

<sup>21</sup> これについて本稿の注 11 および Scherschel (cf. N. B. 1), 39-44. 40-42. を参照。

絶えず神を思うことができるよう、是非次の敬虔な定式をあなたがたの前に置いておきなさい。「神よ、速やかにわたしを救い出し、主よ、わたしを助けてください。」(詩 70:2) 聖書の全証言からこの唱句が選ばれたのは意味のないことではない。というのも、この[唱句]は、人間の本性上起こりうるあらゆる感情を含んでおり、あらゆる状況に、またどんな事態にも、十分かつ適切に対応するからである。実際どんな危険に直面しようとも、[この唱句を唱える者には]神への呼びかけ[の句]がある。[この者には]敬虔な告白をする謙虚さがあり、不安と絶え間ない恐れ[に苛まされるときにも]目覚めている。自身のもろさを知っており、祈りが聞き入れられることに信頼を置く。現在し身近にある保護に常に信頼している。というのも、いつも庇護者に呼びかける者は、そのお方が常に現在しておられることを確信するのだから。<sup>22</sup>

カッシアヌスによると、この定式は「古の師父たちのうち、残った少数の者」よりもたらされた秘伝の句であり<sup>23</sup>、神(キリスト)の臨在を呼び求めるためのエピクレーシス(invocatio dei)である。名で呼びかけられる庇護者(キリスト)の現在を確信しつつ、このお方が、あるときは防壁となり甲冑となり盾となって危険から心身を護り、あるときには「薬 salutis remedia」を投与し力

---

<sup>22</sup> Cassian., conl. X, 10 = SC 54, 85-86: *Erit itaque ad perpetuam dei memoriam possidendam haec inseparabiliter proposita uobis formula pietatis: Deus in adiutorium meum intende: domine ad adiuuandum mihi festina. Hic namque uersiculus non inmerito de toto scripturarum exceptus est instrumento. Recipit enim omnes adfectus quicumque inferri humanae possunt naturae et ad omnem statum atque uniuersos incursus proprie satis et competenter aptatur. Habet siquidem aduersus uniuersa discrimina inuocationem dei, habet humilitatem piae confessionis, habet sollicitudinis ac timoris perpetui uigilantiam, habet considerationem fragilitatis suae, exauditionis fiduciam, confidentiam praesentis semper adstantisque praesidi. Qui enim iugiter suum inuocat protectorem, certus est eum semper esse praesentem.* Cf. Scherschel (cf. N. B. 1), 36; Sirch (cf. N. B. 20), 325.

<sup>23</sup> Ibid. = SC 54, 85-86: *Quae sicut nobis a paucis qui antiquissimorum patrum residii erant tradita est, [...].*

づけてくださることを、この定式の口唱をもって願う<sup>24</sup>。カッシアヌスは、この詩 70:2 によるルミナチオを絶えず黙想し、また実際に口で唱えるよう勤めている。

この [ 唱句 ] を立法者 [ モーセ ] の命令に従って「家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも」(申 6:7) 黙想するように。これをあなたの口の敷居と戸に書きつけ、あなたの家の壁とあなたの心の奥に置きなさい。それは[ この聖句が ]、あなたが祈りのために身を伏すとき、ひざまづく際の唱句となり、その後起き上がって生活のためのあらゆる必要事に向かうとき、忠実かつ不断の祈りとなるためである。<sup>25</sup>

カッシアヌスの紹介する詩編句は、災厄除けのおまじないのように唱えられるべきものではない。詩編作者の「助けてください」と願う心を自身の心として唱える、そのような心構えをこの詩編句の唱者は持っている。このルミナチオを唱える者は、詩編作者が見舞われた危機的状況を思い、これを唱者自身に迫る「危険」と重ね合わせることにより、詩編句を自身の祈りとする。何より、「もろさ」を自覚し、「謙虚さ」を保って庇護者の前に立つ詩編作者の態度が唱者にはある。唱者がその「現在」を確信するのは、キリストである。つまりこのルミナチオは、詩編のメデタチオのキリスト教なりの一つの果実といえるのである。

---

<sup>24</sup> Ibid. = SC 54, 86.

<sup>25</sup> Ibid. = SC 54, 90: *Nunc meditareberis secundum praecepta legislatoris sedens in domo et ambulans in itinere, dormiens atque consurgens. Hunc scribes in limine et ianuis oris tui, hunc in parietibus domus tuae ac penetralibus tui pectoris conlocabis, ita ut haec ad orationem procumbenti sit tibi adclinis decantatio et exinde consurgenti atque ad omnes usus uitae necessarios incedenti fiat erecta et iugis oratio.* Cf. Sirch (cf. N. B. 20), 330.

## むすび

「古の師父たち」より伝えられたカッシアヌスの「敬虔な定式」は、その後、『聖ベネディクスの戒律』において全時課の冒頭で唱えられる唱句と定められ<sup>26</sup>、時課の典礼用の式文として受け継がれてゆく。

他方、東方の修道靈性が西方にもたらしたルミナチオの伝統は、中世において、(詩編唱の代わりとして信徒の間で実践された)「主の祈り」(マタ 6:9-13 par. 参照)や「聖母マリアへの祈り」(ルカ 1:42 参照)のルミナチオに継承されてゆく。いずれも聖書をテキストとする祈りの反唱であり、その意味でメディタチオと呼ばれるに全くふさわしい。この聖母マリアの祈りのルミナチオにキリスト論的な内容が加味されると、「西方の『イエスの祈り』」とも呼ばれる「ロザリオの祈り」へとさらに発展してゆくのであるが、これについては稿を改めて述べることにしたい。

(本稿は「2003 年度南山大学パツへ研究奨励金(Pache Research Subsidy)I-A-2」による研究成果の一部である。)

---

<sup>26</sup> Regula Benedicti. Die Benediktusregel lateinisch / deutsch. Hg. v. im Auftrag der Salzburger Äbtekonzferenz, Beuron 1992, 130 (Cap. XVIII): *In primis dicatur versu: Deus in adiutorium meum intende, domine, ad adiuvandum me festina, gloria;* [...]. これについて古田暁訳『聖ベネディクトの戒律』(すえもりブックス, 2000年), 100, 104, 178 頁をも参照。